

博士論文

近代日本における美育の成立についての研究
—女礼式を手がかりとして—

(要約)

令和3年3月

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

劉 敏

目次

凡例	4
序章 研究の課題	5
1 研究の目的	5
2 先行研究の概観	6
3 研究の視座	8
4 本論文の構成	9
第一章 美育とは何か	11
1 美育の語義と概念	11
1. 1 「美育」という言葉	11
1. 2 美育の概念	12
2 美育思想の淵源	14
3 美育思想の提出	16
3. 1 シラーとその時代	16
3. 2 『美育書簡』	18
4 美育思想の発展	20
第二章 明治日本における美育思想の受容	24
1 スペンサーの教育論における美育思想の初見	24
2 ペスタロッチ主義の訳書における「美育」の初見	26
3 ヘルバルト主義による美育思想の一般化	30
4 社会教育における美育思想の発展	35
第三章 明治期女子教育における美育思想の変容	39
1 容姿の美育	39
1. 1 容姿美の追求	39
1. 2 美容教育の略称としての「美育」	41

2 女性らしさの美育	44
2. 1 女子の本分	44
2. 2 女性美を伸ばすための「美育」	46
3 心の美育	48
3. 1 心の教育への注目	48
3. 2 心の美を養うための「美育」	50
4 女礼と女子美育	52
第四章 女礼の由来とその変遷	57
1 日本礼法の歴史と女礼の由来	57
1. 1 日本礼法の歴史	57
1. 2 女礼の登場とその歴史上の役割	59
2 明治学校教育から女礼の発端	60
3 女礼の再編成	64
第五章 女礼から見る日本の美育	68
1 美的なパフォーマンスとしての女礼	68
2 精神鍛錬としての女礼	71
3 女礼から見る日本的な美育	73
終章 本論の総括	77
参考文献一覧	80
付録	85

美育というのは、美や芸術活動を通して、人格的な陶冶を意味する教育思想である。この思想は古典時代からすでに存在していたが、十八世紀にドイツのシラーによって、初めて明確な理論として提出された。その後、ヘルバルトやペスタロッチなどの理論を加えて、芸術教育としての理論と実際の教育分野でその発展をとげるに至った。この美育思想は明治初期に西洋の教育学説の翻訳作業で、初めて日本に取り入れられた。しかし、当時社会的な状況や日本の知的風土などの影響によって、日本的な理解が加えられ、輸入した美育概念に変容を生じた。その影響の一つとして指摘できるものとして、美育は女子教育の分野において、女礼などを通して、女子を美的育成するものとして使われたことである。これは日本的な独自な変容ではないかと考えている。それゆえ、本論文は美育思想が、近代日本で、西洋から、どのように受容されたか、その経緯と変容の内実を解明する。その際、女性美育に大きな役割を果たした女礼式に着目して、女礼の諸相の分析を通して、日本的な美育の特性を解明しようとするものである。

本論は五章からなる。各章の概要を以下のように記す。

第一章では、美育という概念を巡って考察した。

美育というものは、美や芸術活動を通して調和的な人間を作ることを企てる教育思想である。この教育思想は古典時代の善美一体から由来する。十八世紀に、ドイツのシラーより先哲の理念を引き継ぎ、理性と感性の調和によって「まったき人間」を形成するという美的教育論をはじめて明確な理論規定として打ち出した。その後、芸術教育運動を経て、心理学、教育学などの理論も融合し、芸術作品に接することによって、鑑賞能力を陶冶し、美的感受性を涵養することに重点が置かれるようになった。

第二章では、明治期に主流をなした教育学説の系譜をたどりながら、美育思想の受容の主要な流れを整理した。

西洋的な美育思想は、はじめてスペンサーの教育学説を通して、日本に伝えられた。しかし、その時、美育は人間精神に快をもたらすものと認めながら、実生活に無関係で、スペンサーの功利主義教育思想において比較的後ろの位置に置かれていた。また、ペスタロッチ教育思想をベースにしたアメリカのジョホノットの教育論を翻訳した際に、はじめて「美育」という言葉を使って、紹介された。この「開発主義」的な美育は、絵画、音楽など芸術と接することを通して美を鑑識、創造する能力を育成するというものであった。さらに、ヘルバルト主義教育学の展開において、美育は、美による精神的な感化を受け、徳性の涵養を意図する教育として、法令の支持のもとで、図画、唱歌などを通して実施の段階に入った。最後、社会教育主義思想の影響とパリ万国博覧会の刺激で、美育は産業と結びつける傾向が強まってくる。

第三章では、明治日本において美育思想の変容について考察を行った。

明治維新以後、身分制を解体し、旧来の身分による枠をこえて、通婚の自由が認められた。また、西洋風の生活スタイルの流行により、妻は家の奥にいるのではなく、夫と一緒に社会活動を参加する必要性が生じた。こうした状況において、女子の容姿や外見の美しさが重要視されてきた。女性を対象とする美育は容姿美を追求するブームで、美容教育の大義名分として機能した。また、西洋の男女同権や婦人解放運動などが始まったばかりの明治日本においては、女性に割り当てられた任務として家事と育児のほかに、社会の花や緩和剤となることも求められた。それは、当時の男性教育家たちが、女性の性役割が美、または女性が美を司ると認識し、それを通して男性を慰安することを求めたからである。それゆえ、永江正直を代表とする教育家は、そのための「美育」が欠かせないものと唱えた。さらに、心の教育が大きな比重をもつようになった社会環境において、女子の美育も美的な心を育成することを求めた。三輪田真佐子など教育家は女礼などを通して心の美育を提唱した。

第四章では、女子美育に重要な役割を果たした女礼の由来と変遷について考察した。

江戸の中期に小笠原流の武家礼法を学んだ水島ト也は武家の女子を礼法の指導対象として、女礼というものを確立させた。明治時代に、近代的な学校制度は日本において確立した。女礼は小笠原流当主の小笠原清務の建議で、学校教育に採用され、さらに普及された。伝統芸能の再評価などに伴い、茶の湯や生け花など諸芸は女性がなすべきものと位置づけられ、女性の礼法に組み込まれて、女子教養の代名詞となっていった。

第五章では、女礼の検討を通して日本的な美育の独特な側面を考察した。

女礼は美的なパフォーマンスとして、女子の立ち居振る舞いを規制している。この美的なパフォーマンスを繰り返し稽古しているうちに、伝統的な美的感性を内面化して、最後美の心を育成する。これは日本の身心教育伝統によるものでありながら、日本的な美育の一特性も揭示している。つまり、日本の美育は、身体と精神の両方を重視し、身心の実践を通して、美的思想を内面化し、人格の陶冶や精神の涵養を目指すものである。この点は、日本の美育教育の独自なところと考える。